

# コンラッドが描くディアスポラ像

## —アイデンティティーの多重性と喪失—

渡邊 浩

**Abstract** The word “Diaspora” was originally a term referring to ancient Jewish people who were driven away from Judea (which is now called Palestine) in the 6th Century B.C. However, over time, its meaning and interpretation have gradually changed and expanded. Especially since the middle of the 20th Century, it began to be used for African immigrants, and in recent years, it is now widely applied to a variety of immigrant peoples, both in the East and the West. Regarding Conrad, according to the present interpretation of Diaspora, he himself clearly is a member of a diaspora, as a Polish immigrant, and some of his works also include some features representative of the modern Diaspora literature genre. *Lord Jim*, in which the hero Jim plays an active role as an immigrant in Malaya, is especially interesting because its tragic nature is clearly linked to tragedies often connected with Diaspora. On this point, it seems to present the real anguish experienced by members of a diaspora. Although some of the characters in Conrad’s works cannot be said to be true members of a diaspora, by definition, however, they often suffer the same kind of anguish as diaspora members who are trapped between two different cultures and ways of life. Though his works have already been classified in the classical category, some of them sufficiently fulfill elements of contemporary Diaspora literature. With the development of postcolonial literature, there is an increasing number of writers and works that can be interpreted as “transborder” literature, and the development of this genre can further expand the horizons of Conrad studies from now on.

### 1. はじめに

近年、移民の増加や、そのことに関する問題点の多様化に伴い、「ディアスポラ」(“Diaspora”)という言葉が多く使われるようになってきている。ディ

アスポラの一般的な定義は、次の通りである。「〈離散〉を意味するギリシア語。パレスティナを去って世界各地に居住する〈離散ユダヤ人〉とそのコミュニティを指す」。また「イェルサレムが紀元前6世紀に陥落後、バビロニア人が捕囚したユダヤの人々の子孫だけではなく、その後の歴史を通じて、政治的・経済的理由などから各地に散った人々もさす」。そして「1950年代から60年代にかけては移住するアフリカ系住民、その後は更に様々な移民系住民に対しても拡大解釈が及んでいる」。<sup>1</sup>

とくに第二次世界大戦後の移民の増加やグローバル化にともない、この半世紀のうちに、拡大解釈がされるようになっていく。オックフォード大学のロビン・コーエン(Robin Cohen, 1944-)によると以下のプロセスを経て拡大解釈がなされ、研究されてきたと分析している。

All scholars of diaspora recognize that the Jewish tradition is at the heart of any definition of the concept. Yet if it is necessary to take full account of this tradition, it is also necessary to transcend it—for at least two reasons. First, as I have been shown, the tradition is much more complex and diverse than many assume. The religious zealots in the tradition of Ezra and the prophets should not be allowed to appropriate the Babylonian and Sephardi experiences to their cause. Those experiences were distinguished by considerable intellectual and spiritual achievements which simply could not have happened in a narrow tribal society like that of ancient Judaea. The voluntarist component in the history of Jewish migration should also not be overlooked. Not all Jewish communities outside the natal homeland resulted from forcible dispersal. Indeed, there is considerable evidence to suggest that the Jews are not a single people with a single origin and a single migration history. (Cohen, 21)

コーエンは、ディアスポラの定義は、古典的用法の、普通大文字から始まる単数形であり(Diaspora)、「主としてユダヤ人の経験の研究に限られていた」ということは認めるにしても、現代の解釈としてさらに拡大解釈すべきであること、またそうしなくてはならない社会の必要性が生じていることを強調している。ディアスポラは上記の内容にもあるように、必ずしも強制的に祖国を追われた者ばかりではなく、自発的に祖国を立ち去った者もあり、決して一つの枠組みにくくれるものではない。またユダヤの民ば

かりではなく、世界情勢の国際化とともに、「例外的な若干の偶発的な言及を除けば、1960年代～1970年代に古典的意味は体系的に拡張され、アフリカ人、アルメニア人、アイルランド人の離散の描写のように、より一般化された」という指摘もある。<sup>2</sup>

1980年代以降の第二の段階では、現代ディアスポラ研究の旗手ともいべきサフラン(William Safran, 1930-)が明快に述べているように、ディアスポラという語は、人々の「異なる種類のカテゴリー」を「隠喩的に指示」するものとして動員された。それは手短かにいえば、国外追放者、強制退去者、政治的亡命者、外国人居住者、移民、エスニックあるいは人種的マイノリティーも含まれる。さらに、再びサフランによれば、ディアスポラは、この語を自分自身に適用したり、あるいはラベルとしてこの語を適用されたりする「異なる種類の人々」の膨大な群れを指示するようになった。ディアスポラ概念は、この複雑性に応じて根本的に再形成されなければならない。またさらに、「世紀の終りまでに、現在の統合の段階が始まった。社会構築主義者の批判は部分的には受け入れられたが、ディアスポラの観念の持つ、分析のおよび記述的な力の多くを台無しにする危険性を持つとも見なされた」と彼は指摘する。ここで、サフランのディアスポラの定義に関する説を引用する。

... 1) they, or their ancestors, have been dispersed from a specific original “center” to two or more “peripheral,” or foreign, regions; 2) they retain a collective memory, vision, or myth about their original homeland—its physical location, history, and achievements; 3) they believe that they are not—and perhaps cannot be—fully accepted by their host society and therefore feel partly alienated and insulated from it; 4) they regard their ancestral homeland as their true, ideal home and as the place to which they or their descendants would (or should) eventually return—when conditions are appropriate; 5) they believe that they should, collectively, be committed to the maintenance or restoration of their original homeland and to its safety and prosperity; and 6) they continue to relate, personally or vicariously, to that homeland in one way or another, and their ethnocommunal consciousness and solidarity are importantly defined by the existence of such a relationship. (Safran, 83-84)

これをまとめると、次のようになる。「1.中心から周縁の場所への離散、2.郷土 (homeland) の記憶、ビジョン、神話を維持、3.ホストからは受け入れられないこと、又はその心情、4.帰還すべき場所としての郷土、5.郷土の維持や回復に関わること、6.集団としての維持や結束がこれらの関係性によって決定的に定義される」。

このように、本来のユダヤ民族に関するディアスポラの定義から踏み出して、国際的なマイノリティーの移民系の人々をディアスポラと解釈する動きは、この半世紀ほどの間に発展してきたといえる。それはポストコロナリズムの研究動向や視点と決して無関係ではなく、各植民地が独立し、また移民・難民の推移が、第二次大戦後も大きく増加している状況と必然的に関連があると考えられる。

## 2. 移民としてのコンラッド

ここで注目したいのは、コンラッド(Joseph Conrad, 1857-1924) と彼の作中の登場人物たちが、こうしたディアスポラに関する範疇に入るのか、という点である。サフランは論文の中でポーランド系移民に関しても定義している。

However, the Poles who settled in France between the Polish insurrection of 1830 and the end of World War I (like the poets Mickiewicz and Slowacki), and many who fled Poland between 1939 and 1944, could be considered members of a genuine diaspora. They regarded themselves as temporary residents, were convinced that “Poland[is] not yet lost as long as we live,” vowed to fight for the reestablishment of the Polish state, and meanwhile also acted as “fighting middlemen” in the service of the causes of their host countries. (Safran, 85)

ここではフランスのポーランド系移民を分析しているが、近年英国でのポーランド系移民の人口は 80 万人を超えているという事実から見ても、英国におけるポーランド系の人々も、現在拡大解釈されているディアスポラとしての地位や立場を十分に有しているといえる。またそれは、「元来ふるさとの地からのトラウマを伴う離散と、強制的に離散させられた集団的記

憶の中で、故郷の地が突出していることである」という定義にも合致している。コンラッド自身も、1914年の第一次世界大戦が勃発した年にもポーランドに帰郷し、晩年にもポーランドに帰りたい意思表示をするなど、祖国に対する愛着を生涯もっていた。この事実を鑑みると、やはり彼は、現代のディアスポラの範疇に入ることは明らかである。またサフランの説では、「彼らはもともとの中心地から、なじみのない二つ以上の地域へ離散してきた」という条件を挙げているが、コンラッドがポーランドからフランスへ、そしてイギリスへと移住した経緯を考えると、この点でも彼にはディアスポラとしての資格があるといえる。

コンラッドの存命中に、ディアスポラという言葉が、今日のように広い意味での移民に対して使用されたことは、おそらくなかったであろう。しかし現在のディアスポラ研究の視点からみると、移民問題の国際化と共に、ポストコロニアリズム以前の作家を、ポストコロニアリズムの視点で分析することが、決して無意味ではないように、ディアスポラ分析の視点で、古典的な作家を考察することも、当然有意義であると考えられる。

周知の通り、コンラッドが描く地域は、彼の作家活動の前半において、マレー、アフリカ、ラテンアメリカ、東欧、西欧と推移する。そして主人公たちが背負う西欧文明を中心とした背景と、彼らが踏み込んでゆく異文化の環境とが相克する様相を呈し、彼が描くペルソナは、その多くが単なる移民や植民者という立場ではなく、祖国の文化にとらわれ、またある意味ではその重荷に苦しむ人々となっている。これはまさに、祖国を様々な事情で脱することになったディアスポラたち、と呼べるのである。

また「離散・故郷への志向・境界の維持」という経緯をみると、彼らが、トラウマによるか自発的な理由で故郷を離散し、故郷への志向を保持するという流れは、おそらくコンラッド自身が抱えていた苦悩と問題でもあり、登場人物たちにもはっきりと窺える特徴なのである。

### 3. 『ロード・ジム』とディアスポラの問題

まず初めに、コンラッドの創作活動の原点でもある「マレーもの」、その代表作である『ロード・ジム』(Lord Jim, 1900)を考察してみる。コンラッドの傑作と考えられる作品には、その多くにおいてディアスポラ的な悲劇

が込められている。たとえば、ジム(Jim)にしても祖国イギリスのエリート船員としての失敗から、インドやラングーン、タイ、インドネシアと流れてゆくことになり、周知のごとくマレー群島の村パトゥーサン(Patusan)に流れ着く。彼の辿った道筋は、当然のことながらコンラッドが東洋で見聞した地域を巡り、最終的にオランダ領マレー群島の一角を舞台とすることになる。元来、西欧人の若者としてのジムの人生と、またアジアで活躍する青年ジムという異質にも思われる存在を一つの物語にまとめた点は、ある意味では違和感を生じさせる部分もある。しかし、一人の人間が異文化に接するとき何が生じるのか、どのような心理と問題を抱えるのかという点に関して、非常に興味深い環境設定がなされたといえる。彼は確かに西欧人としての過去や自分を捨てよう、また忘れようと努力したに違いない。彼はパトゥーサンを紹介された時、はっきりと今までの世界に見切りをつけ、「こんな幸運を逃してなるものか」(“I wouldn't spoil such a magnificent chance!”) (LJ, 241)と述べ、二つ返事で現地へと向かうことになる。

当初の予定であったパトナ(Patna)号の事件で物語が終了していたならば、この作品も異文化の問題に関わることはなかったはずである。東洋にジムが流れつくこと自体が、この作品にとっても、異文化の問題やディアスポラの問題にとっても、幸運な出来事であった。

ここで最初の長編『オールメイヤーの阿房宮』(Almayer's Folly, 1895)やその他の作品とも比較してみたい。この作品でもすでに、コンラッドの作風の萌芽が見られるように、異文化の中に入り込んだ西欧人の悲劇が語られている。しかしオールメイヤー(Almayer)にしても、次の『島の流れ者』(An Outcast of the Islands, 1896)のウィレムズ(Willems)にしても、西欧人としての傲慢さが現れている。それにひきかえジムに関しては、ベインズ(Jocelyn Baines)が述べているように、その人物描写の秀逸さは、作家が祖国ポーランドを棄てて出て来てしまった、という罪の意識が創作させたものだという指摘があり、作家と共通した罪の意識を、主人公が体現しているという説もある。<sup>3</sup> このことは、ある意味で、作家も主人公もディアスポラの苦悩を体現しているといえるのである。内発的であれ外発的であれ、祖国を立ち去った悩みや後悔は、コンラッド的な特色であり、それは、作

家が晩年になっても祖国を訪れ、また帰郷しようとした事実からも窺える。

そうした意味で、主人公がどれほどその悩み、すなわちディアスポラ的な悩みを深く体現しているのかが、作品に深みを与えているカギともいえる。オールメイヤーやウィレムズが、果たしてディアスポラ的な悩みを抱えていたかの否かについて考えてみたい。オールメイヤーの場合は、一旗揚げるつもりでセレベス島(Celebes)にやってきたのであり、その地に帰化する気持ちなどはさらさらなく、また最後まで自分は西欧人でありオランダ人である、という立場を少しも疑ってはいなかった。また世話になったリングード船長(Captain Lingard)の養女で土着民の娘と結婚した時も、リングードの財産目当てであり、ゆくゆくはヨーロッパに帰ることしか考えていなかった。

リングードの金鉱探しの失敗等も重なり、また愛情を注いでいた混血の娘ニーナ(Nina)も、バリ島の酋長の息子デイン(Dain)と恋仲になり、オールメイヤーの言うことを聞かず駆け落ちをする。彼の人生の目的は、あくまでも自己の世間的な成功であり、またヨーロッパに帰ることであり、ニーナに対してもヨーロッパ的な教育と生活を強要しようとする。彼は明らかに、西欧人としての自覚とアイデンティティーに疑いを持たず、現地の文化を軽蔑し、環境を利用することしか考えていなかったといえよう。

また『島の流れ者』に関しては、時代はオールメイヤーの物語よりも十数年さかのぼる話であり、登場人物たちもかなり重なっているが、ウィレムズの生き方にしても、エゴイストとしての西欧人の生き方には変わりない。彼は、リングードに世話になり、現地のエージェントとして活躍できる機会を得るが、利害で対立するオールメイヤーと不仲になり、結局リングードを裏切る羽目になる。リングードを裏切った彼は、罰として僻地に取り残される。彼をライバル視するオールメイヤーの奸計に落とし入れられ、愛人に殺される結末を迎える。しかし、彼は最後まで自分の裏切りや悪行の罪を認めようとはせずに、人生の失敗は全て環境のせいにしてしまうのである。

これらのプロットからも理解できるように、オールメイヤーとウィレムズは、ほぼ類似した文明観を共有した人物といえる。そして二人の主人公たちは最後まで西欧人としてのアイデンティティーに固執し、物質的な成

功を追い求めて挫折する人生をおくることになる。そこには現地の文化や人々との関係に対する敬意はなく、あくまでもそれらを利用する態度や優位に立とうとする心理が感じられる。これは、二重のアイデンティティーに苦しむディアスポラの悩みとは、実質的に異なるものといえよう。

それに対してジムの場合は、パトナ号の遭難事件以来、「船員免許」を取り消され、また自分の過去と決別して、「白紙の状態」で出直したい、という希望を募らせてゆく。そして過去と決別するように、自分を追いかけてきた西欧の陰から逃げまどい、マーロー船長(Captain Marlow)の友人シュタイン(Stein)の紹介で、最後にパトゥーサンにたどりつく経緯は、運命的であり、また、ディアスポラの悲劇性を感じさせる。<sup>4</sup> マーローの期待通りの活躍をし、新たな生活を始めたジムは、現地の人たちにも溶け込もうと努力する。

“... He had still his old trick of stubborn blushing. Now and then, though, a word, a sentence, would escape him that showed how deeply, how solemnly, he felt about that work which had given him the certitude of rehabilitation. That is why he seemed to love the land and the people with a sort of fierce egoism, with a contemptuous tenderness.” (LJ, 248)

酋長のドラミン(Doramin)やその夫人に対しては、両親のような愛情を抱き、息子のデイン・ワリス(Dain Waris)には、親友としての友情を感じる。

また、西欧と現地の世界を対比させる点に関しては、継父コルネリウス(Cornelius)から虐げられていたジュエル(Jewel)とジムが恋仲になり、二人の仲が深まるにつれて、彼女からジムがもとの西欧世界へ戻ってしまうのではないかと、という声が聞かれるようになる。シュタインの下で働きながらも、ジムをライバル視するコルネリウスは、何度となくジムの命を狙おうとするが、そのたびにジュエルの機転により命を助けられる。数年後にパトゥーサンにジムを尋ねたマーローは、たまたまジュエルから彼女の不安を聞くことになる。

もの心つかぬうちにパトゥーサンに連れてこられ、現地の世界しか知らない彼女にとっては、自分と生き別れになった実の父親や、早くなくなった母親にしても、白人たちが全てヨーロッパの世界へ目を向けていたこと

が、よく理解できずにいる。ジムのみが西欧世界に帰らぬ例外とはいえないのでは、と強い疑念を抱く。マーローはジュエルの問いかけに対し、外界の世界（西欧）が彼を必要としていないから、と答えるのが精いっぱいであり、しつこく疑問を投げかける彼女に、「彼はそれほど立派な人間とはいえない」（“Because he is not good enough”）（*LJ*, 318）、「誰でも完璧な人間などいない」（“Nobody is good enough”）（*LJ*, 319）と答えることが精いっぱいであった。

翌朝、村を去ってゆくマーローに対して、一度は「皆によるしく言ってください」と言いながら、「何も言わないでください」と言い直すジムには、完全に祖国との絆を断とうとする決意が現れていた。

“‘Tell them . . .’ he began. I signed to the men to cease rowing, and waited in wonder. Tell who? The half-submerged sun faced him; I could see its red gleam in his eyes that looked dumbly at me. . . . ‘No—nothing,’ he said, and with a slight wave of his hand motioned the boat away. . . .”（*LJ*, 335）

ディアスポラの特徴として、自分の生まれ持った文化とアイデンティティーを積極的に保持しようとする態度をもつものと、本来の自己を捨てようとしても棄てきれない者がいるが、ジムは後者にあたり、ある意味ではネガティブなディアスポラということができのかもしれない。とにかく彼は西欧人である過去の自分を忘れ去ろう、また捨て去ろうと努力するが、彼の態度の端々に、それを全うできない自分があることも見てとれるのである。

おそらくその端的な場面は、悪漢ブラウン(Brown)との対決であろう。ジムは現地で信頼を得るために、大きな危険をおかすことになる。村を危機に陥れていたアラブ人シェリフ・アリ(Sherif Ali)を、英雄的な活躍で「双子の丘」から追い出し、陰險な支配者ラージャ(Rajah)の力を封じることにも成功する。彼の信頼と力を用いれば白人たち、ブラウン一味を一掃することは訳ないことだったに違いない。しかしブラウンと真正面から対峙し言葉を交わしたジムは、「君はこの土地に何をしに来たのか」と尋ねられた時に、返事に当惑する。この時ジムは、否が応でも自分の過去に向き合わず

にはいられなかった。

“‘Who are you?’ asked Jim at last, speaking in his usual voice. ‘My name’s Brown,’ answered the other loudly; ‘Captain Brown. What’s yours?’ and Jim after a little pause went on quietly, as if he had not heard: ‘What made you come here?’ ‘You want to know,’ said Brown bitterly. ‘It’s easy to tell. Hunger. And what made you?’” (*LJ*, 380)

なぜ今まで英雄的な活躍をしてきたジムが、ブラウンを倒すことに躊躇したのであるか。おそらく自分の過去を見た気がした、あるいは悪党とはいえ、行き場をなくして他国を彷徨うブラウンに、同じディアスポラの不幸と悲哀を感じ取ったと推察できる。何らかの同情心がなければ、彼を倒すことはたやすいはずだったと考えられるからである。

しかし、この事件がきっかけとなり、ジムが転落の道を歩み始めることは周知の通りである。彼は船員として、衝動的に船から「飛び降りた」というだけの些細な事件の為に、西欧という一つの世界から身を隠すことになった。そして今、彼が自らの手で作り上げたもう一つの世界が、崩れ落ちることになるのである。

Then Jim understood. He had retreated from one world, for a small matter of an impulsive jump, and now the other, the work of his own hands, had fallen in ruins upon his head. (*LJ*, 408).

この点は、ジムに関しては自己破壊的な要素として、引き合いに出される部分であるが、彼の心に潜む臆病、優柔不断という弱い心を象徴する出来事、大きな局面に対峙した時に、逃げてしまう弱さが表象され、ひいてはコンラッドが、祖国が危機に瀕した際に、立ち去ってしまった自己との相克を表す部分とも解釈できる。ここにもディアスポラとしての苦悩が表現されているといえるであろう。

なぜ作家は、白人のブラウンを登場させ、ジムを破滅に向かわせたのであろうか。敵役のキャラクターとしては、いくらでも現地人間や周囲の人物たちでも、設定ができたはずである。しかしブラウンの登場により、

ジムは必然的に自分の過去、捨ててきたはずのアイデンティティーを思い出さずにはいられなくなったのである。ジムはマーローに対しても、二度と元の世界（西欧）に戻ることはご免であると宣言し、また現地の人たちを愛し、彼等に尽くそうと努力を重ねた。そのジムが、再び過去の自分に引き戻されるという設定は、明らかに自己の二重のアイデンティティーに悩む、すなわちディアスポラ的な苦悩を感じることになる。彼は結局、このディアスポラとしての苦悩に打ち勝つことができず、押しつぶされたと解釈できる。また、その苦悩が巧みに描かれているがゆえに、この作品を秀逸なものにしているとも分析できるのである。他のマレーものの長編作品には、こうしたディアスポラ的な苦悩を深く抱えるキャラクターは見受けられない。自分の西欧人としての立場を疑う者はなく、現地の活動に関しては、自己の欲望と保身の為だけに苦慮する姿が描かれているのである。

#### 4. 他の作品について

このように考えてみると、本当のディアスポラ的なキャラクターと、似非ディアスポラ的な人物たちを比較できる作品は、他にも見られる。たとえば「アフリカもの」の中では、「文明の前哨地点」(“An Outpost of Progress,” 1897)と「闇の奥」(“Heart of Darkness,” 1899)が、よく比較されている。両者ともに、異文化を考えさせる作品である。作家は、「闇の奥」がアフリカの戦利品であるのに対して、「文明の前哨地点」は取るに足らない部分であると自嘲的に述べているが、「文明の前哨地点」は、そのモチーフやアイロニーの深さにおいて、決して軽薄な作品とはいえない。<sup>5</sup>しかし人物描写に関しては、かなり異なっている。

二人のベルギー人、カイヤール(Kayerts)とカルリエ(Carlier)は、個人的な事情から西欧世界で落ちこぼれた人間たちとして描かれている。彼らは、最後まで西欧人としての傲慢さとプライドを棄てはしなかった。最後の場面で、迎える蒸気船を待つカイヤールの叫びである「汽船が来たぞ」(“Steamer! Steamer!”) (*Tales of Unrest*, 116)という言葉は、もう一度ヨーロッパに帰ろうとする、彼の悲痛な叫びと同時に、あくまでも西欧文明に固執する、落ちぶれた落伍者の叫びとしてとらえることができるのである。

それに対し、「闇の奥」におけるクルツ(Kurtz)の叫びは、明らかにディア

スポラとしての苦悩を感じさせるものがある。貿易会社のエージェントとして活躍していた彼を、定義上のディアスポラと断定することはできないかもしれないが、あくまでもディアスポラと同じような経験をした人物として解釈することはできる。おそらくジムと同様に、彼が現地で活躍する背景には、その西欧人としてのアイデンティティーと技量が有効に働いたに違いない。しかし、彼がジムと同じように、現地の人を愛したかどうかについては疑問の余地がある。彼は、その狂気と不気味さで、現地人に畏怖される雰囲気を漂わせていた。クルツの狂気を示す描写は随所に見られるが、以下の部分は典型であろう。

“Kurtz discoursed. A voice! a voice! It rang deep to the very last. It survived his strength to hide in the magnificent folds of eloquence the barren darkness of his heart. Oh, he struggled! he struggled! The wastes of his weary brain were haunted by shadowy images now—images of wealth and fame revolving obsequiously round his unextinguishable gift of noble and lofty expression. My Intended, my station, my career, my ideas—these were the subjects for the occasional utterances of elevated sentiments. The shade of the original Kurtz frequented the bedside of the hollow sham, whose fate it was to be buried presently in the mould of primeval earth. But both the diabolic love and the unearthly hate of the mysteries it had penetrated fought for the possession of that soul satiated with primitive emotions, avid of lying fame, of sham distinction, of all the appearances of success and power.” (*Youth and Two Other Stories*, 147-48).

クルツが代表する西欧文明の欲望が、ついにはあらゆる価値観を飲み尽くす、あるいはそれを否定する世界に飲み込まれる状況が現れる。ここで重要な点は、クルツが好むと好まざるとにかかわらず、自分が本来持っていた価値観や世界観を否定されたことが、彼の狂気と思われる言動につながることである。そして、複数のアイデンティティーや価値観に苛まれるディアスポラ的な苦悩が彼に憑依するのである。それにひきかえ「文明の前哨地点」における白人たちは、ヨーロッパに帰還することのみを望み、自分たちの言動に反省の様子を見せることはない。

南米に関する作品では、『ノストローモ』(*Nostramo*, 1904)が代表格であ

る。南米自体が移民の国であり、原住民を除くほとんど全てが、ある意味でディアスポラの性質を有しているとも考えられる。この物語に登場する多くの人物たちが、主人公ノストローモ(Nostromo)をはじめ、彼の親代わりのようなヴィオラ(Viola)やテレサ(Teresa)、また鉱山経営者のグールド(Gould)夫妻、デクー(Decoud)の存在なども、ヨーロッパと南米にまたがる文化的な影響関係を示している。特に注目すべきところは、主人公ノストローモが、イタリア人の人足頭として登場している点である。南米のイタリア系移民は、スペインやポルトガル系移民に肩を並べるほど多く、コンラッドも、その状況を把握していたものと考えられる。またノストローモも、そして彼の恩人であるヴィオラも、元来イタリアの統一運動を推進したガルバルディー(Garibaldi)派という政治組織に加わっていたということを考えると、当時の政治状況なども巧みに描写されていることがわかる。

次に、ノストローモの人生が、ディアスポラ的な苦悩や宿命を抱えていたのか、という問題を考察してみる。この物語が、政治小説的な要素を色濃く含んでいる以上、彼の人生も、そうした渦に巻き込まれることは必然といえる。彼がヴィオラに忠誠を誓い、イタリア人としての誇りも高く、当初「墮落しない」(“incorruptible”)人間として描かれる。しかし、上層部や富裕層に利用されていたと思ひ込み、幻滅を抱いた彼が、リビエラ派を裏切り銀を独り占めしたことが語られる。彼の人種的なルーツをたどると、イタリア系移民としてヴィオラに世話になり、そして政治的にも、ヨーロッパ側のリビエラ(Ribiera)やグールドたちに味方していた。だが彼が、個人的な感情で裏切ることにより、最終的に自分も支援者たちも裏切ったことになる。彼は自分の一番の恩人であるヴィオラを裏切り、彼の娘たちを弄ぶようなことまでしてしまう。親同然とも思っていたヴィオラに、遊び人のラミレス(Ramirez)と間違われて射殺されるという結末は、誇り高きイタリア人ノストローモとしてのアイデンティティーを自ら捨て去ったことにより、同じイタリア系のヴィオラに殺されるという運命的な結果になったといえる。この点からも、自らのアイデンティティーを棄てるのか、また否定するのかというディアスポラ的な苦悩が描かれている。

最後に、『西欧の眼の下に』(*Under Western Eyes*, 1911)を考察してみたい。この作品にも、完全にディアスポラと呼べる人物は登場していないが、デ

ディアスポラに近い体験や悩みを抱える人物は多数登場している。主人公のラズーモフ(Razumov)は、スパイ活動で国外に派遣されるまでは、おそらく一度も祖国ロシアを離れたことがない人物であった。しかし、官憲から任された任務により、たまたまスイスのジュネーヴ(Geneva)を訪れ、自分が官憲に売り渡した反体制の学生ハルディン(Haldin)の家族たちに出会った時に、大きな感情と思想的な変化が生じる。ジュネーヴ自体が、当時西欧の国際的な政治活動の拠点という働きをしており、この点も象徴的と言える。簡潔にまとめると、国家主義的な生き方と人間主義的な生き方の板挟みとなったラズーモフの苦悩を描くことにより、コンラッドはロシアの政治体制を批判しているのである。

ラズーモフは、定義上のディアスポラではない。しかし西欧の自由思想の牙城と目されていたジュネーヴを訪れ、反体制主義者や様々な異邦人と交わることにより、自分が信じていた思想や世界観以外のものと遭遇することになる。これは大きなカルチャーショックであり、異文化との遭遇を経験するディアスポラたちと同じような体験をしたことになる。彼はもしかしたら祖国から亡命する選択肢があったかもしれないが、最終的に自分の良心に正直に生きることを選択する。そして社会に対しても自分のような生き方や考え方が受け入れられる状況をかすかに期待しながら、祖国で生きる道を選ぶ。再び祖国に戻ろうとするディアスポラも当然存在するが、多くの場合、理想とする祖国と現実の祖国とは同等ではないことに気付くのである。

コンラッドの短編に関しても、「エイミー・フォスター」(“Amy Foster,” 1901)などは、大いにディアスポラの問題を想起させる作品といえる。ポーランド人とおぼしき青年ヤンコー(Yanko)が、移民船の難破によってたまたまイギリスの田舎町コールブルック(Colebrook)に流れ着き、そこで地元の女性エイミー(Amy)と恋に落ちる話であるが、単なるロマンスではない。一度は愛情によって結ばれたかのように見える二人が、子供が生まれたことにより、子育てに関する意見の相違、特に言葉の問題やそれにまつわる互いの誤解が生じることになる。最後にはエイミーが恐れを抱き、ヤンコーは失意の中で病に倒れ亡くなる。典型的な異文化を背景とした物語であり、ヤンコーのディアスポラ的な悲劇が描かれている。

## 5. むすび

このように見てくると、コンラッドの傑作、問題作とみなされる作品には、異文化どうしの遭遇とその問題点に焦点を当てた作品が多いことに気付かされる。それは、コンラッドの出自を見る限り当然ともいえるが、そうしたディアスポラとしての、あるいはディアスポラ的な悩みを深く分析することにより、作家は巧みな人物描写に成功しているといえよう。ディアスポラの視点から分析した場合に、その問題意識をどこにもつべきなのか、という点が重要になる。もう一人のディアスポラ研究者ブルベイカー (Rogers Brubaker) は、トランスボーダーの問題について次のように言及している。

Transborder relations are as old as borders, and one can argue about the relative weight of such relations and processes now versus one hundred years ago, but I think scholars have shown pretty convincingly that those processes are not in fact more intense now in terms of trade, or even the movement of people. Indeed, the movement of people into the US was considerably more intense, in relation to the size of the population, one hundred years ago than it is today. We have a misleading impression of something unprecedented in the contemporary epoch. Yes, changes in the speed and cost of communication and transportation have been very important, but they haven't created an epochal break, and we don't live in a radically mobile, rootless, deterritorialized world. I just don't think that's a plausible picture of our social world. (Sturm and Bauch, 195)

彼の意見は、ディアスポラの定義を狭めることではない。そうではなく、ディアスポラを、境界付けられた集団としてでなく、むしろ実践、事業、企図、態度などのカテゴリーとして扱うことによって、実態的にとらえることにある。だが、想定に基づく分析を優先させることは、実態を無視したカテゴリーの分析、またボーダーを基準とした把握を優先させてしまうことになる。上記のように、ボーダーを超えた人々の動きや活動は人類の歴史とともにあった訳であり、彼らの移動と交流の原因と必然性を無視して分析はできないのである。そうした人々の生活と実態を踏まえた理解と分析が、ディアスポラとその問題解決にとって重要であることを、ブルベ

イカーは提示している。この指摘にもあるように、ディアスポラ分析とは、定義の押し付けやそれに関連する問題を前提として考えるのではなく、むしろその問題点の解決に目を向けなければならないということである。

コンラッド作品は、様々な角度からディアスポラ的な分析が可能なものが多い。現在の視点から見て、ディアスポラの解釈が拡大し変化しつつある以上、当然将来を想定した視点で分析の目を向けてゆかなくてはならないであろう。しかし、現在の視点や基準で過去を分析することは、当然どの分野においても大切な研究手段であり、文学においても古典を現代の視点で評価することは、大いに有効である場合もある。特に作品内容が普遍的なテーマを含んでいる場合は、そうした手法が当てはまるものと期待できる。コンラッドの場合は、異文化との遭遇や国際的な政治関係、テロリズム、また国どうしの支配関係など、現代にも当てはまる普遍的テーマを多く含んでいる。そうした意味で、ディアスポラに関する視点でコンラッド作品を分析することは、コンラッド解釈の地平を広げ、また作品解釈の多様性につながることになる。単なる問題提示ではなく、そうした事柄の解決をどうすべきかという問題提起がある限り、コンラッド作品は永続的に魅力ある作品として生き続けるであろう。

## 注

\*本稿は、「日本コンラッド協会第3回全国大会」（於東京女子医科大学、2017年11月12日）における著者による同名の研究発表原稿を基に、加筆訂正を加えたものである。

<sup>1</sup> ディアスポラの定義に関しては様々な意味を含む場合がある。『ブリタニカ』によると、古代にパレスティナの地を離れたユダヤ系の人々とその集団という定義の他に、19世紀半ばごろから見られる顕著な民族の移動から始まり、それが具体的にはっきりと現れる20世紀にかけて、様々な事情で移住した民族やその地域を指すようになってきたことが説明されている。

Diaspora, populations, such as members of an ethnic or religious group, that originated from the same place but dispersed to different locations. The word *diaspora* comes from the ancient Greek *dia speiro*, meaning “to sow over.” The

concept of diaspora has long been used to refer to the Greeks in the Hellenic world and to the Jews after the fall of Jerusalem in the early 6th century BCE. Beginning in the 1950s and 1960s, scholars began to use it with reference to the African diaspora, and the use of the term was extended further in the following decades. (*Encycropedia Britanica*)

- <sup>2</sup> コーエンは同書の続きの部分で、伝統的なディアスポラ解釈の拡大をはからねばならない第二の理由を挙げている。これは後のサフランの分析と重なるので、あえて注におさめることにした。

The second reason why we have to transcend the Jewish tradition is that the word diaspora is now being used, whether purists approve or not, in a variety of new, but interesting and suggestive contexts. To mount a defence of an orthodox definition of diaspora, which in any case has been shown to be dubious, is akin to commanding the waves no longer to break on the shore. (Cohen, 21)

つまり両者の意見はほぼ一致しており、それはやはり現在世界を取り囲む情勢がディアスポラの拡大解釈を求めており、今後その語の応用性に期待している。

- <sup>3</sup> ベインズはジムの人生を「罪」と「償い」の旅と規定し、巧みに抽象化している。この分析はすでに古典的になっているが、ディアスポラの苦悩と重なる点が窺える部分である。

Conrad raises the significance of Jim's action to a metaphysical level and in his portrayal of Jim's spiritual Odyssey explores the theme of guilt and atonement. Every character and every incident is subordinated to and intended to develop this theme. But it is so intricately worked out that it is sometimes difficult to grasp the purport of a remark or an episode. (Baines, 242)

ディアスポラの定義上、その中に様々な事情を抱えた人々や民族が含まれることになるが、悲劇的な特色を分析すると、コンラッドが描く悲劇性と共通する精神性が浮かびあがる点が興味深い。

- <sup>4</sup> ジムが運命を克服するとは臆病を克服することである、という視点はしばしばこの物語に登場する自己破壊的要素の一つとして取り上げられる。コンラッドの場合、臆病と勇気による償いは表裏一体となっており、そうした意味では抽象化されているといえる。コンラッド作品の主人公たちの悲劇が比較的共通した形で現れる理由は、この点にも起因していると考えられる。

Cowardice in the face of the crucial test was contained in Jim's destiny; and only by conquering his destiny could he atone for his offence. An act of cowardice had to be expiated, with the supreme act of courage, the deliberate going to meet certain death. (Baines, 252)

- <sup>5</sup> 「文明の前哨地点」に関しては、コンラッドは控えめに説明している。しかしこの作品がもつ強い印象やアイロニーは紹介にあるように、実体験や見聞に基づいているからであろう。「闇の奥」が象徴的とするならば、この作品は等身大の描写でできている印象を与える。そのパロディー的な要素も含めて、ディアスポラになり切れぬ者の悲劇という見方もできる。

An Outpost of Progress is the lightest part of the loot I carried off from Central Africa, the main portion being of course “The Heart of Darkness.” Other men have found a lot of quite different things there and I have the comfortable conviction that what I took would not have been of much use to anybody else. And it must be said that it was but a very small amount of plunder. All of it could go into one’s breast pocket when folded neatly. *As for the story itself it is true enough in its essentials.* The sustained invention of a really telling lie demands a talent which I do not possess. (Author’s Note to *Tales of Unrest*, vii) (イタリック筆者)

## 参考文献

- Baines, Jocelyn. *Joseph Conrad: A Critical Biography*. London: Weidenheld and Nicolson, 1960.
- Cohen, Robin. *Global Diasporas: An Introduction*. Seattle: University of Washington Press, 1997.
- Conrad, Joseph. *Almayer's Folly*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 1. London: Gresham, 1925.
- . “Amy Foster.” *Typhoon and Other Stories*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad, Vol. 3. London: The Gresham 1925.
- . “Heart of Darkness.” *Youth and Two Other Stories*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 6. London: The Gresham, 1925.
- . *Lord Jim*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 4. London: Gresham, 1925.
- . *Nostromo*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 8. London: Gresham, 1925.
- . *Under Western Eyes*. The Medallion Edition of the Works of Joseph Conrad. Vol. 12. London: Gresham, 1925.
- Safran, William, “Diasporas in Modern Societies: Myths of Homeland and Return.” *Diasporas: A Journal of Transnational Studies* 1.1 (1991) 83-99. Web. 10 Oct 2017.
- Sturm, Tristan, and Nicholas Bauch. “Geopolitics Conversation: Nationalism and

コンラッドが描くディアスポラ像

Geography: An Interview with Roger Brubaker.” *Geographics* 15:185-96, Web. 2010.

小倉充夫、鈴木慎一郎『ブラック・ディアスポラ』明石書店, 2010.

駒井洋、江成幸『ヨーロッパ、ロシア、アメリカのディアスポラ』明石書店, 2010.

首藤とも子『東南・南アジアのディアスポラ』明石書店, 2010.

陳天麗、小林知子『東アジアのディアスポラ』明石書店, 2010.

中川文雄、田島久蔵、山脇千賀子『ラテン・アメリカン・ディアスポラ』明石書店, 2010.

宮治美江子『中東・北アフリカのディアスポラ』明石書店, 2010.

(わたなべ ひろし 就実大学 教授)